

『月刈藻集』良源関連説話考

——混乱の要因とその過程——

畑 中 智 子

はじめに

『月刈藻集』は、江戸期に書かれた、和歌説話集である。作者は未詳であるが、成立年については、現存写本の内表紙に「于時宝永庚寅春書写之。件本寛永午春トアリ。所々後人追加アリ可考。」と注記があることから、寛永七年（一六三〇）、寛永十九年（一六四二）がその下限とみなされている^①。内題の下に「人語隨筆時代不同」と注記がある如く、多くの説話の冒頭が「人語云」という語で始まり、伝聞した話が時代順不同のまま、聞き書き風に集められている。

さて、『月刈藻集』には、慈恵大僧正良源（九一二〜九八五）に関する和歌説話が、一話収録されている。本話も冒頭に「人語りて云はく」とあり、何らかの出典が想定されるのであるが、直接の出典は不明である。しかしながら、本話に先行する説話の中に、本話中に見える和歌と類似した和歌が読み込まれており、それらとの関係が示唆される。本稿では、関連する各説話における諸要素の考察から、説話間における混乱の要因を明らかにし、本話の成立過程について仮説を立て、検証する。加えて、良源像の変遷と本話の関係について付言する。なお、『月刈藻集』の本文は、『続群書類従』を使

用し、適宜諸本との校異を示す。⁽²⁾

一、『月刈藻集』に見える良源関連説話

良源は、平安中期に活躍した天台宗の僧侶である。第十八代天台座主を務め、学問の奨励や堂舎の復興に力を尽くし、比叡山の中興の祖、とされる。朝廷からの信頼も厚く、冷泉天皇が東宮時代には、東宮護持僧も務め、最終的には僧官の最高位「大僧正」に補せられた。又、その験徳も称えられており、没後までもない時期から信仰の対象となった。『月刈藻集』下巻には、良源に関する次の説話が見える。

人語云。円融院ノ御時ニ慈恵僧正ウチヘマイリタマヒ。女ニ五ノ障ノ経文イトフトク講シタマフ。御廉ノ中ヨリアル女房詠テ曰ク。

後ヨリ無漏地ニ通フ釈迦タニモ羅睺羅カ母ハ有ト聞ナリ

トナンキコヘシニ僧正返シニ。

否ヤイナンキテモ見ヘキカイカグリノエメハ一度落モ社セメ

(八十〜八十二頁)

右は、円融院の御治世に、慈恵大僧正（良源）が宮中に参内して、女性には五つの障りがあるという経文を大變尊い様子で講義なさった、その折に御簾の中から女房が歌を詠みかけ、良源がそれに答えた、という話題である。ここで詠まれた、女房と良源の和歌について解釈を試みる。

まず、女房が良源に歌いかけた和歌は、諸本間で本文に異同がみられる。続群書類従本では、初句が「後ヨリ」とあるが、静嘉堂文庫・実践女子大学所蔵本には「ウロシヨリ」とある。この表記の内、続群書類従本に従うと、和歌の意味がとりにくい。又、第二句に「無漏地」とあることから、静嘉堂文庫・実践女子大学所蔵本の「ウロシ」は「有漏地」と考

えられる。有漏地とは、汚れや煩惱に汚された迷いの世界を指し、無漏地とは、汚れが全て滅しつくされた清浄な世界をいう。有漏地と無漏地は、対立する概念であり、『弘安十年本古今集歌注』には、「有漏地」と「無漏地」を一对にして読み込んだ、次の和歌が引用されている。^③

有漏路余里無漏路爾通郭公不一方音於鳴覽
ウロチヨリムロチニカヨフホトギスヒトカタナヌネヤナクラシ

（片桐洋一著『中世古今集注釈書解題2』、赤尾照文堂、昭和四十八、三六〇頁）

この和歌は初句・第二句の表現が、『月刈藻集』所収和歌と同一であり、有漏地と無漏地が一对で和歌に読み込まれた先例の一つである。意味の上からも、表現の先例があることから、『月刈藻集』の和歌は、

有漏地より無漏地に通ふ釈迦だにも羅睺羅が母は有ると聞くなり

とすることが適当であろう。「うろし」と「うしろ」は字句が似ていることから、続群書類従本では混同されたのではないだろうか。

女房が良源に歌いかけた、この和歌の意味は、「煩惱に汚された迷いの世界から清浄の世界へと往来するお釈迦様でさえ、その子羅睺羅の母はいると聞いている。」であり、「悟りを開いたお釈迦様でも、男女の契りを交わした女性がいると聞いている。だから、貴方もこちらにいらしては如何か。」という、女房からの誘いの歌、と解釈できる。

次に、良源が女房に答えた和歌について検討する。この和歌の本文に異同はない。良源の返歌は、次の通りである。

否やいなんきても見べきかいがぐりの笑めば一度落ちもこそせめ

この和歌の意味は、「いやいや、立ち去ろう。来ても対面するべきであろうか。（否、対面するべきではない）いがぐりが笑ったら（割れたら）最後、落ちてしまふかもしれないから。」となる。第三句・四句の「いがぐり」が笑うとは、「いがぐり」が割れる様子を表しており、女房の笑い顔を暗に示している。「いがぐり」が熟して割れる意と笑い顔になる意を

かけて、「いがぐり」と「えむ」という二つの語を読み込んだ和歌は、この他にも数例みえる。つまり、この歌は、「貴女がお笑いになったら、戒を破ってしまうかもしれないから、対面せずに立ち去ろう。」という、良源が女房からの誘惑を退け、対面を断った歌である。

本話は宮中を舞台に、軽妙な和歌の贈答を描いていることから、一方では、宮中における社交の様子を伝える説話、という側面がある。又、他方では、女房の誘惑を退けた良源の姿を描いていることから、女犯を戒め、道心を堅持した高僧の姿を伝える説話、という側面もある。いずれに重きがおかれるかによって、この説話の主題は変わってくる。この点については、「四、『月刈藻集』下巻における本話の位置——良源和歌説話の成立——」で明らかにする為、ここでは、本話には二つの側面がある、ということを描するに留める。

さて、冒頭でも述べたが、現時点で、本話の典拠を明確に提示することはできない。しかし、類似する和歌を含む説話を指摘することは、可能である。次に、それらについて考察を加え、本話との関係を探る。

二、説話の背景①——女房と良源の和歌——

女房が良源に詠みかけた和歌は、『本朝祖師伝記絵詞』（耽空著、嘉禎三年、一二三七成立）に見える。本書は法然の伝記であるが、この記述は以降の法然伝『法然聖人絵』・『法然上人伝絵詞』・『拾遺古徳伝』にも引き継がれている。

室泊につき給ければ君たちまいり侍けり。むかし小松天皇、八人の姫宮を七道につかはして、君の名をとめ給中に、天王寺別当僧行尊拜堂のためにくたられける日、江口神崎の君達、御船ちかくふねをよせける時、僧のふねに、みるしくや申ければ、神歌をうたひいたし侍ける。

うろちよりむろちにかよふ釈迦たにも羅睺らがはゝはありとこそきけ

と打いたし侍ければ、さま／＼の纏頭し給ける。(句読点、畑中)

(法然上人傳研究会編『法然上人傳の成立史的研究』第二卷、臨川書店、昭和三十六、二四八～二四九頁)

右は、法然が室の泊に到着した時に、「君たち」(遊女)が参上したという記述で、天王寺別当行尊(一〇五五～一一三五)に関わる、一つの逸話が紹介されている。それによると、行尊が拝堂の為に下向した日、江口神埼の遊女達が船を近寄せてきたので、「僧侶の船に、(遊女の船が近づくとは)見るに耐えない。」と言った。それに対して、遊女が「清浄な世界に住んでいるお釈迦様でさえ、その子羅睺羅の母はいると聞いている。」と声を上げて唱えたので、(感心して)色々の祝儀をした、とある。ここで詠まれた歌は、最後の句が「ありとこそきけ」となっており、「有卜聞ナリ」とする『月刈藻集』と異なるが、他の部分は同文である。なお、本書においては、ここで話題が閉じており、行尊が返歌をした、という記述は見えない。又、良源には、このような遊女との逸話は伝わっていない。

良源の返歌については、『古今著聞集』(橘成季編、建長六年、一二五四成立)所収の道命(九七四～一〇二〇)に関する説話に、近似した和歌が載る。次に『古今著聞集』第八卷「道命阿闍梨歌を以て和泉式部に答ふる事」を示す。なお、この話題に類話は見られず、良源が和泉式部と関わる説話も、管見によると、現時点で見出すことはできない。

道命あざりと和泉式部と、ひとつ車にて物へ行けるに、道命うしろむきてゐたりけるを、和泉式部「などかくはゐたるぞ」といひければ、

よしやよしむかじやむかじ
おそろしやむきともむかじ
いが栗のえみもあひなば落ちもこそすれ

(日本古典文学大系、岩波書店、昭和四十一、二五二頁)

右は、「好色」に分類される説話で、道命と和泉式部が車に同乗し、外出した時の逸話である。道命が車の中で、後ろを向いて座っているの、和泉式部が「どうしてこんな風に座っているのか。」と尋ねた所、道命が「そちらを向いて、貴女

が笑い顔になられたら、車から落ちてしまうだろうから（戒律を破ってしまうだろうから）。」という意味の和歌を詠んで答えた、とある。ここで詠まれた歌は、初句が「よしやよし」とあり、『月刈藻集』の「否ヤイナン」と異なるほか、多くの字句が異なる。しかし、「いがぐりのえみ」という語を用いて、相手の魅力的な様子を表現している点や、その魅力的な笑顔によつて、自分は戒律を破ってしまうことになるだろう。だからそちらを向くまい、と述べる点など、良源の和歌と同じ発想で詠われており、近い関係にある。

このように、行尊・道命に関する説話には、『月刈藻集』所収話と近似する和歌が詠まれており、何らかの関係が示唆される。そこで、『月刈藻集』所収話とこれらの説話について、それぞれ共通点と相違点を整理をする。

まず、『月刈藻集』所収話の舞台は、「円融院ノ御時」（平安中期）の宮中に設定されている。登場人物は、良源と女房で、説話は二人の贈答歌によつて構成されている。この説話には、宮中で女房と和歌の贈答をする僧侶の姿・女犯を戒め道心を守った僧侶の姿が描かれており、説話の主題は、どちらに主眼がおかれるかによつて変わる。

それに対して、行尊・道命の説話では、それぞれの舞台設定が、行尊が天王寺別当であった時代（平安後期）の船上、道命が活躍した時代（平安中期）の車中であり、平安時代という点では共通するが、場所については『月刈藻集』所収話と異なる。又、登場人物についても、行尊と遊女、道命と和泉式部とあり、男女一組―僧侶と女性―という点では共通するが、それぞれ全く別の人物である。更に、説話の構成も、『月刈藻集』所収話が贈答歌によつて構成されているのに対して、行尊・道命の説話では、それぞれ遊女の歌、道命の和歌で構成されており、和歌の贈答がなされていない点で『月刈藻集』と異なる。加えて、行尊の説話は、遊女の船が近づくことを退けた、僧侶の態度を批判する内容であり、「遊女に戒められた僧侶」が主題として描かれている。又、道命の説話は、色好みで有名な和泉式部と車に同乗し、遊戯的な歌を詠むという内容で、「色好みの破戒僧」を描くことに主眼が置かれている。つまり、両話における主題は、『月刈藻集』所収

話の主題と性質を異にしているのである。以上から、各説話は、時代が平安時代、登場人物が「僧侶と女性」という男女一組、和歌を中心にした話題構成、という共通点はあるものの、それぞれ全く別の説話であることが分かる。

『月刈藻集』所収話では、先行する説話に見える、遊女の和歌と道命の和歌とが、一対になって説話が構成されていた。本話の成立には、行尊と道命の説話が一体化し、登場人物が良源に入れ替わった、という過程が推測できる。では、これら全く別の説話は、如何なる混乱を経て一体化したのだろうか。次に、混乱の要因を探るため、行尊と道命の人物像について明らかにする。

三、説話の背景②—人物像—

まず、行尊と道命について概略を示す。

行尊は、天台宗寺門派に属し、平等院大僧正とも呼ばれた、平安後期の僧である。参議源基平の子で、小一条院の孫に当る。永久四年（一一一六）、園城寺長吏に補せられ、山門衆徒の為に全焼した、園城寺の再興に力を尽くした為、寺門中興の祖と仰がれた。又、その験徳の高さから、鳥羽天皇の護持僧を務め、宮廷からの信頼も厚かった。更に、諸寺の別当を兼ねており、逸話中に「天王寺別当」とある如く、元永元年（一一一八）五月に、天王寺別当に補された。又、歌人としても知られ、勅撰集に和歌が入集している。

道命は、平安中期の僧侶である。大納言藤原道綱の子で、『蜻蛉日記』の作者藤原道綱母の孫に当る。『尊卑分脈』に「能読／天王寺別当 哥人／阿闍梨」と注記があることから、阿闍梨の位を授けられ、天王寺の別当を務めたこと、『法華経』の講読に優れていたこと、歌人であったことがわかる。又、『大日本国法華経験記』には、道命が良源の弟子であった、という記述が見える（後出）。

ここで、二人の経歴から、それぞれが良源と混同された可能性について検討する。まず、行尊と良源は、共に宮廷と親しい関係にあり、皇族の護持僧を務めたこと、朝廷から僧官の最高位「大僧正」に補せられたことなどで共通する。又、両者は、寺院の最高責任者である天台座主（良源）・園城寺長吏（行尊）として、堂舎の再興に力を尽くし、中興の祖、と言われた点も同じである。しかし、右に挙げた共通点はあるものの、両者には大きく相違する点がある。まず、年齢が約一五〇年も隔たっており、世代が異なる。又、良源が天台宗山門派に、行尊がそれに対立する寺門派に属しており、所属する寺院が異なる。これらの点から、両者に関する記憶が新しい時代に、二人を混同することは考えにくい。では、時代が下がり、その年齢差や所属が問題とならない段階であれば、両者を混同する可能性があるだろうか。確かに、その可能性は皆無ではない。しかし、良源が死後、信仰の対象となり、民衆にまで広く尊崇された人物であること、良源に遊女との説話が伝わっていないことを考慮すると、時代が下がった段階でも、両者を混同する可能性は少ないと考える。

次に、道命の経歴では、良源と師弟関係にあったことに注意すべきである。良源と道命が師弟という、極めて近い関係にあったことは、両者の説話が混同される要因と成り得る。つまり、元は弟子（道命）の話題であったものが、その師（良源）の話題と取り違えられた可能性が考えられるのである。更に、道命の経歴では、行尊と同じく「天王寺別当」の役職に補されていることにも注目したい。

さて、『月刈藻集』所収話は、「女二五ノ障ノ経文」（『法華経』か）の講義を終えた良源が、女房に和歌を詠みかけられ、それに返歌をかえす、という説話であった。この話題からは、和歌・『法華経』・女性という、鍵になる言葉を見出すことができる。故に、この言葉に着目して、行尊・道命の人物像を確認し、本話との関わりについて考える⁽⁸⁾。

（1）和歌に関する評価

行尊と道命は、共に優れた歌人と評価されている。行尊について書かれた『今鏡』（講談社学術文庫下）、昭和五十九、二（二四頁）「平等院僧正行尊」には、「僧正歌詠みにおはして、代々の集どもにも多く入り給へるところ聞き侍れ。」との人物評が記載されている。行尊が優れた歌人であった、という逸話は『撰集抄』などの説話集にも散見され、広く知られた人物像であったといえる。^⑨ 道命も又、中古三十六歌仙の一人に数えられており、『梁塵秘抄』（日本古典文学大系、岩波書店、昭和四十、三四三頁）には「和歌にすぐれてめでたきは、人丸赤人小野の小町、躬恒貫之壬生の忠岑、遍昭道命和泉式部」と、和歌の名手として列挙されている。^⑩

歌人としての印象が強い両者に対して、『月刈藻集』所収話の主人公、良源はどうであろうか。良源には、和歌に関する逸話が『月刈藻集』を除くと殆ど見られず、^⑪ 歌人としての印象は極めて希薄である。良源と和歌に接点が殆ど見られない点や、『月刈藻集』所収話が和歌説話である点を鑑みると、『月刈藻集』所収話は、歌人として著名であった、行尊や道命にこそそふさわしい感がある。

（２）『法華経』に関する説話

道命が『法華経』を受持し、その験徳が明らかであったことは、『大日本国法華経験記』『天王寺の別当道命阿闍梨』に詳しい。次にその冒頭部を挙げる。なお、行尊には『法華経』に関する説話は見えない。

道命阿闍梨は、傳大納言道綱卿の第一男なり。①天台座主慈恵大僧正の弟子なり。幼少の時、比叡山に登りて、仏道を修行せり。法華経において、一心に読持して、更に他のことなく、一年に一巻を誦して、八年に一部を誦せり。処々の靈験の勝地を巡礼して、薰修年尚し。就中に、②その声微妙幽美にして、曲を加へず音韻を致さずといへども、任運に声を出すに、聞く人耳傾けて、随喜讃嘆せり。

（日本思想大系、岩波書店、昭和四十九、一六四頁）

右には、冒頭で道命の出自が示され、「天台座主慈恵大僧正の弟子なり」（傍線部①）と、道命が良源の弟子であったことが記されている。同様の記述は『今昔物語集』・『元亨釈書』にも見え、よく知られた師弟関係であったといえよう。⁽¹²⁾ 続いて、道命が『法華経』を一心に読持し、仏道に励んだ様子が語られる。又、『法華経』を誦する声が「微妙幽美」で、聴聞した人が随喜讃嘆した（傍線部②）とあり、読経の音が優れていたことが記されている。この話題の後には、諸神が道命の読経を聴聞に来る話題、道命の『法華経』読誦による功德で、悪霊に取り付かれた女の病が治った、という話題が続く。このように、『大日本国法華経験記』に、道命は一貫して、優れた『法華経』受持者・験徳の高い人物として描かれている。このような道命像は、『今昔物語集』を初め、多くの書に見えることから、広く知られた人物像であったといえる。⁽¹³⁾ なお、験力に優れていた、という人物像は、行尊にも良源にも共通する。⁽¹⁴⁾ 特に、行尊に関しては、『今鏡』に「名高き験者」と評されており、物の怪に取り憑かれた待賢門院をその験力で治療した、という逸話が伝えられている。このように、道命と行尊は、女性を験力で治療した僧侶、という点で重なる。

さて、『今昔物語集』（日本古典文学大系24、岩波書店、昭和三十六）には、道命に関する興味深い逸話が収録されている。それは、「凡ソ、経ノミニ非ズ、物云フ事ゾ、極テ興有テ可咲カリケル。」と評される、宮中女房との逸話である。

中宮ニ阿闍梨ノ参タリケルニ、女房ノ問ケル様、「引経ニハ何クカ貴クハ有ル」ト。阿闍梨、「琵琶・饒・銅鉞ト云フ所コソ引クニハ貴ケレ」ト答ケレバ、女房イミジウ咲ケリ。
(一九六頁)

右には、中宮に参上した道命阿闍梨に対して、宮中女房が「引経ニハ何クカ貴クハ有ル」と問いかけたのに対し、道命が「琵琶・饒・銅鉞ト云フ所コソ引クニハ貴ケレ」と答えたので、女房は大層笑った、とある。ここに描かれているのは、女房とのやりとりを楽しむ道命の姿で、仏道に専心する法華経受持者という人物像とは、また異なっている。

以上、『法華経』に関する説話に見える道命像は、『月刈藻集』所収話とどのように関連するのだろうか。まず、『法華

『月刈藻集』を講じるのに優れていた、という道命像は、『月刈藻集』所収話冒頭部「ウチヘマイリタマヒ。女ニ五ノ障ノ経文イトトフトク講シタマフ。」とよく合致する。加えて、道命には、求道者としての真摯な姿だけでなく、軽妙な会話を宮中女房と交わす、気軽で明朗な性格を示す逸話も伝えられていた。道命におけるこの性格設定は、『月刈藻集』に描かれた、宮中で女房と歌を詠み合う人物としてふさわしいといえよう。つまり、『月刈藻集』における良源を、道命に置き換えたとしても、なんら不自然はないのである。

では、道命に対して、師である良源はどうか。良源も宮中法華八講に出仕しており、法相宗の法藏・仲算と熾烈な論戦を繰り広げた「応和の宗論」は有名である。つまり、宮中で「女ニ五ノ障ノ経文」を講じたとする、『月刈藻集』所収話冒頭部との間に齟齬はない。しかし、経を講じた後に、女房と和歌のやりとりをする、という本話の展開にのみ注目した場合、『月刈藻集』所収話は、より道命にふさわしい逸話、と感ぜられるのである。

(3) 女性に関する説話

さて、『古今著聞集』の説話は、道命と和泉式部が車に同乗していた時の逸話であった。道命と和泉式部との交渉に関する説話は、よく知られており『宇治拾遺物語』・『古事談』・『沙石集』などに収録されている。『宇治拾遺物語』（日本古典文学大系、岩波書店、昭和三十五、五十三・五十四頁）には、道命が和泉式部の元に通って情をかわした後に、精進潔斎をせずに読経をした為、梵天・帝釈天ではなく、五條の道祖神が聴聞に来る、という話題が見える。この説話で、道命は「色にふけりたる僧」と評されている。『古事談』（国史大系、吉川弘文館、昭和七、六十三頁）にも同話が収録されており、そこで道命は「好色無双之人也」とされる。又、『沙石集』には、和泉式部の下へ通っていた道命に、主人の保昌が復讐する、という次の話題が載る。

(和泉式部が、畑中注) 保昌ニヲモハレテアリケルニ、道命マメヲトコニテ通ケルガ、或時保昌俄来ル。隠ルベキ所ナクシテ、鎧唐櫃〔に〕入レテ置タルヲ、保昌サヨト(三字、内本「サトリ」)知テ、此鎧日ニホセトテ、取出ケレバ、只今恥ガマシキ事出キナムト、二人ナガラ肝心〔モ〕ナカリケルニ、蓋ハナアケソトテ、日ニスコシアテ、後、此鎧祇園ノ御社ヘ持テ参テ、志ス事侍リ、明神ヘタテマツラセ給ヘト、執行ノ御房ニ申セトテ、マイラセケリ。御宝前ニ置テ、執行ヲ尋ヌルニナシ。私ニハ開キガタシトテ、所司神人供待ケルニ、アマリニワビシカリケレバ、唐櫃ノ中ニ音アリテ、只所司〔開ニ〕開ケト云音アリ。開テ見ニ、鎧ハナクテ執行ノ御房ナリケリ。

(日本古典文学大系、岩波書店、昭和四十一、四八八頁)

この説話において道命は「マメヲトコ」と評されており、主人の留守を狙つて女のもとに通う、色好みの破戒僧として描かれている。このような道命像も又浸透していたらしく、道命を称賛していた『大日本国法華経験記』にも、「我(道命、畑中注)仏法に入るといへども、三業を調へず、禁戒を持たずして、意に任せて罪を作りき。」(一六六頁)という、女犯に対する反省の言葉が記されている。以上の通り、道命には色好みの破戒僧、という人物像が見て取れるのであるが、行尊にも良源にもそのような側面は見られない。

さて、この人物像は、『月刈藻集』所収話にふさわしいものといえるだろうか。本話を宮中における社交の様子を伝えた説話、と限定すれば、この人物像も違和感なく受け入れられよう。しかし、後述するが『月刈藻集』の配列、話題の収録目的を考えると、『月刈藻集』所収話において「色好みの破戒僧」という人物像は、到底受け入れられない。

以上、行尊と道命の人物像について概観した。そして、道命と良源が師弟関係という近い関係にあること、行尊と道命に重なる部分が見られること、本話の宮中における社交という面のみに注目した場合、『月刈藻集』所収話が、道命にふさわしい話題であることを指摘した。次に、『月刈藻集』における良源関連説話の位置を考察し、本話の主人公が良源でなく

てはならない理由について言及する。

四、『月刈藻集』下巻における本話の位置―良源和歌説話の成立―

『月刈藻集』の構成、説話配列の原理については、原田行造氏が『月刈藻集』の研究―構成の実態と説話の特徴をめぐって―という論考で明らかにしている^⑬。

本書は上中下三巻に組織され、筆者の認定によれば上巻六十話・中巻五十話・下巻六十七話の計百七十七話にて構成されている。配列の基本原理は、話形・発想上ほぼ類纂的な手法が根幹をなしている。

右に述べられている通り、『月刈藻集』では、前話題を受けて次の話題が展開するという、話題の連鎖が見える。又、本書下巻は、同氏によると「歌論・歌学とその証歌や実作上の諸問題が取り扱われ」ており、第一群から第九群で構成されている、とある。良源に関する和歌説話は、第一群「和歌の発生とその重要性」に続く項目、第二群「和歌的世界の広大さと深淵さ」に属している。第二群の冒頭には、次の記述がある。

人語云。歌ハ神明意述ナリ。代々御示現ウタニテシメシタマフコト多シ。又佛心教化モ歌ニテコソ見ヘタリシアマタ侍リ。サレハ代々ノ神司儒門学子釈氏僧侶モウタヨマヌハアラシ。本朝儒者ハ神明ヲ引テオノレカ党トシ。佛氏ハ神明ヲノレカ護神トス。(以下略)

(八十頁)

この冒頭話では、和歌が神仏両教に不可欠であることが宣言されており、「佛心教化」は歌でこそなされることが多い、神道・儒教・仏教の者も歌を詠まないものはない、と述べる。そして、以下に僧侶が和歌を詠んだ説話を列記している。説話は「大僧正慈円」・「慈恵僧正」(本話)・「瞻西上人」・「良喜法師」・「一遍上人」・「夢想国師」・「一休」と続き、第三群へと移る。この僧侶の詠作に関する説話群について、原田氏は次の通り述べる。

この群では、慈円の仏教修行が和歌によって支えられていることを明示した後、慈恵・瞻西・良喜・一遍とほぼ時代順に女犯を戒める堅固な道心が説かれ、美貌も一皮下は不浄という思想に立脚して、⑪（夢想国師の説話、畑中注）、⑫（一休の説話、同）で中近世の名僧の歌が提示されているのである。

原田氏の説に従うと、『月刈藻集』にみえる良源の和歌は、仏心教化の為に詠われた歌であり、本話は「女犯を戒める堅固な道心」を主題としている、となる。次に、同じく配列されている説話を一、二例挙げて、氏の説を確認する。

同云ク。良喜法師六波羅蜜寺ノ講ノトキ。導師ニテ聴聞ノ中ヲワケテ高座ニマカルホトニ。アル女房ノ良喜法師ノアシヲオサヘテ。イタクツミ侍リケレハ。サテ高座ニアカリテカクゾヨミケル。

人ノ足ヲツムニテ知ヌ我方ヘフミヲコセヨト云ニソ有ヘシ

（八十一頁）

右は、高座に上ろうとする良喜法師の足を女房が押さえて抓ったので、その女房に対して和歌で応酬する、という話題である。本話における「公衆の面前で和歌を詠み、女房の行動を明らかにする」という良喜法師の行動は、女房を牽制し、女犯を戒めたものと解釈でき、本配列の主題と合致する。又、同じく配列される、夢想国師の話題には、「アルホトノ不浄ヲツム皮衣色ニマヨヘル人ソキタナキ」（八十一頁）という和歌が見え、美しい女性も一皮下は不浄である、という不浄観が詠まれている。以上より、原田氏の説は、首肯できるものと確認でき、本話の主題は「女犯を戒める堅固な道心」として良いと考える。次に、先行する説話中の和歌と、『月刈藻集』所収話の和歌を比較し、その相違点から本話の主題を確認する。

まず、遊女と女房の和歌では、最終句が異なる。前者は、最終句が「ありとこそきけ」と強調する形になっており、遊女を退けようとした行尊を、強い語調で批判するのにふさわしい形である。それに対して、女房の歌は最終句が「有ト聞ナリ」という伝聞の形に変化しており、それとなく良源を誘う歌にふさわしい。

次に、道命と良源の和歌について考察する。道命と良源の和歌は共に、破戒を恐れて、女性の魅力を遠ざけること誓った歌であった。しかし、道命の場合、歌を詠じた時、既に和泉式部と車に同乗していたことから、拒絶の態度も遊戯的と感じられる。更に、本話が『古今著聞集』において、「好色」に分類されていることから、本歌が道心を主題とした和歌でないことは明らかである。一方、良源の和歌では、道命の和歌で「よしやよし」とある初句が、「否やいなん」と変化しており、強い否定を表す「否や」という言葉が冒頭に詠み込まれている。この語句には、女房の誘惑を撥ねつける、良源の克己心が表現されているといえよう。以上、字句の変化により、女房の歌は、批判的で厳しさを感じさせる遊女の歌から誘いかけの歌へ、良源の歌は、遊戯的な気分をもつ道命の歌から、誘惑を撥ねつける道心を表した歌へと姿を変える。つまり、本話における和歌は、『月刈藻集』下巻、第二群の主題に合致した形へと変化しているのである。

先に、説話の舞台設定や人物像に注目すると、本話が良源よりも道命の説話として、ふさしい面を持つことを指摘した。しかし、『月刈藻集』の配列・主題を考慮すると、この説話の人物は道命よりも良源がふさわしいと思われる。以下、良源と女性に関する逸話について考察し、そのことを明らかにする。

良源と女性を結びつける記述は、和歌説話と同様に殆ど見られない。しかし、良源には女性に仏縁を結ばせる為に、比叡山の外で舍利会を行った事実があり、『天台座主記』貞元二年条には、次の記述が見える。

次 四月二十日 於神樂岳西吉田社北建立、重閣講堂結構、数字雜舍行会前習礼。悉如山儀式。是為不攀登山嶽之女人類、礼拝如来舍利、令結佛縁也。
(句読点、畑中) (渋谷慈鑑編『天台座主記』、昭和四十六、四十四頁)

右傍線部には「是れ山嶽に攀登せざるの女人の類、如来の舍利を礼拝し、佛縁を結ばしめんが為なり」とあり、山外における舍利会が、女人結界のある比叡山に登ることのできない女性の為に行われた、と記されている。この話題は『今昔物語集』巻第十二「比叡山行舍利会語第九」にも見え、そこでも良源は、山外の衆生（女人も含）の為に舍利会を行った

濫觴とされている。又、『撰集抄』（岩波文庫、昭和四十五、七十三―七十六頁）には、道心深い娘に、良源の髑髏が『法華經』を授ける、といった話題が収録されており、「さても、慈恵大師の、遠国の佛法まれなるさか柴山に跡たれて、無佛世界の衆生を度したまはんとかや。」との評語が見える。このように良源は、女性と関わる数少ない記述の中で、衆生を教導する宗教的指導者、として描かれている。

『月刈藻集』所収話が、『月刈藻集』を離れて存在していたならば、説話の主題が「宮中における社交」であっても違和感はない。しかし、本話は『月刈藻集』に所収されており、和歌による仏心教化を語る一連の話題に属している。仏心教化を軸に展開する、この配列の中にあつては、女房を和歌でたしなめる人物は、色好みの破戒僧である道命よりも、女性を教導する良源こそがふさわしい。もし、この説話の登場人物が、道命であつたならば、軽妙な和歌のやり取り、という気分が漂い、道心を堅持する僧侶の説話とはならなかったのではないだろうか。この説話は、良源を主人公とし、『月刈藻集』の配列の中にあつてこそ、仏心教化の和歌説話として生きてくる。

五、混乱の要因とその過程

さて、これまで本話が、先行する二つの和歌を利用して、新たな主題をもつ和歌説話を創造した可能性について述べた。現時点において、先行する説話には類話が見られず、本話を含む他の文献も見当たらない。本話が『月刈藻集』に収録されるまでには、様々な文献への収録が想定され、又、様々な変遷を経たものと考えるのが自然である。しかし、今は限られた資料の中で、考察を進めるよりほか方法はない。そこで本章では、この説話が、行尊・道命の説話とどのように関わって、形成されていたものか、仮説を立て、検証する。『月刈藻集』所収話に関連する、各作品の時代・場所・登場人物・和歌・主題について、表にまとめたものを次に示す。

	『月刈藻集』		『本朝祖師伝記絵詞』		『古今著聞集』	
時代	平安中期		平安後期		平安中期	
場所	宮中		船上（江口神埼）		車中	
登場人物①	良源		行尊		道命	
登場人物②	宮中女房		遊女		和泉式部	
和歌①（有漏地より）	○（女房）		○（遊女）		×	
和歌②（否やいなん）	○（良源）		×		○（道命）	
主題	女犯を戒め、道心を堅持した僧侶		狭い料簡を、遊女に戒められた僧侶		和歌を詠み、女性と戯れる僧侶	

先にも述べたが、右によると、それぞれの逸話は、時代設定が平安時代と共通するが、舞台設定・登場人物に加えて、その言わんとする主題も異なり、全く別の説話であることが分かる。しかし、それぞれの和歌が近似していることから、本話の成立に関して、これらの作品が全くの無関係であるとは考え難い。現段階では、その変化が『月刈藻集』編者によるものか、その前段階におけるものか、定かではない。しかし、これらの説話から本話成立の過程を探ることは、可能なのではないか。先の検討で、本話をめぐる人物―行尊・道命・良源―には、それぞれ類似する点があることを明らかにした。これらの類似点は、説話において、人物の混乱を誘発する要因となったと考えられる。以下、混乱の要因を指摘し、本話の成立過程について私見を述べる。

本話の成立について、先に結論を述べると、三段階の混同を経て成立したのではないかと推測している。まず、第一段階として、行尊の説話が道命の説話と混同された可能性が指摘できる。行尊と道命には、次の共通点が見える。

① 宮中に縁があり、歌人として有名な僧侶である。

② 「天王寺別当」の職についていた。

③ 物の怪に取り憑かれた女性を、その験力で治癒させた逸話が残る。

これらの共通点から、行尊と道命が、後世において混同された可能性は十分考えられる。和歌に優れ、「天王寺別当」を勤めた人物で、同じような効験の説話があるということは、二人の人物を混同させるに足る要因であろう。つまり、「著名な歌人・天王寺別当・験徳の高い僧侶」Ⅱ「道命」という連想から、行尊の説話が、道命の説話として認識された、と考える。行尊の説話に遊女が登場することも、女性に縁の深い道命の人物像と相俟って、混同された可能性を示唆している。つまり、本話成立の第一段階には、「行尊の説話→道命の説話」という過程が考えられるのである。なお、行尊の説話が、道命の説話と混同されることなく、本話へと流入した可能性も皆無ではない。しかし、行尊と良源の関係の希薄さから、その可能性は低いと思う。

第二段階としては、遊女の歌と道命の歌が一对となって、説話化した過程が想定できる。両話における和歌に注目すると、それぞれの和歌は、僧侶に対して「遊女」・「和泉式部」という、色を好みの女性関わっているという共通点をもつ。また、両歌ともに「僧侶の破戒」という主題を読み込んだ歌である点も共通する。まず、共通の人物設定、共通の主題から、元々は別の説話に読み込まれた和歌が、一对の贈答歌となったと仮定でき、その上で「女二五ノ障ノ経文」という鍵となる言葉を中心に、それらの和歌を含む説話が成立した、と考えることができる。つまり、第二段階としては「遊女の和歌+道命の和歌Ⅱ女房と道命の贈答」という過程を想定することができよう。

第三段階として、この説話が道命から良源へと、人物を転換させる段階があったと思われる。先の検討で、『月刈藻集』所収話には、良源の弟子、道命にふさわしい面があることを指摘した。では、道命にふさわしいこの話題が、何故、良源

の説話として収録されているのだろうか。この場合、故意に「道命」を「良源」へと改変した可能性、偶然に両者が混乱して伝えられた可能性が考えられる。前者である場合、前章で述べたような事情から、説話の主題に合わせて人物の改変がなされたもの、と推測できる。後者の場合、混乱を誘発する要因として、良源と道命が師弟という近い関係にあったこと、両者共に『法華経』に関する説話が伝わっていることなどが考えられる。『月刈藻集』の成立年代が、江戸期であることを考慮すると、時代が隔たる内に、道命の逸話が、師の良源の逸話として、記憶されたことも十分にあり得るだろう。現時点では、故意の改変か、人物の混乱か、判断することは難しい⁽¹⁷⁾。しかし、いずれの場合であつたとしても、本話が、様々な混乱を経て成立した説話であり、良源にこうあつて欲しい、と思う人々の願望から生まれたことは確かである。狭い料簡を断じられた僧（行尊）、色好みの破戒僧（道命）という、僧侶のマイナス面を伝えた説話は、主人公を良源とし、『月刈藻集』に収録されることで、仏心教化を主題とする説話へと転換し、新たな説話として生命を得たのである。

おわりに―良源像の変遷の中で―

以上、『月刈藻集』所収話について、女房・良源の和歌を中心に考察をし、その成立過程について仮説を立て、検証した。結果、本説話が何段階かの混乱を経て成立し、『月刈藻集』に収録されることによって、新たな意味を持つ説話へと変化したことを述べた。

さて、この話題は、良源像の変遷を考える上でも、興味深い要素を持っている。最後になるが、良源像の変遷と本話の関係について、少しく触れる。

京都蘆山寺には、良源の遺品とされる鬼面が所蔵されている。その鬼面にまつわる逸話として、良源の異形像について述べる中で、平林盛得氏は次の伝説を紹介されている。

こうした異相像の反動として、良源は実際は大変やさしい綺麗な顔つきをしていて、内裏に参上するのにさいし、宮中女官の噂にのぼるのを嫌い、わざと鬼面を用意し、参内にはこの面をかぶったという説もある。

『良源』吉川弘文館、昭和六十二、二二三―二二四頁

鬼面をつけて宮中に参内する美貌の僧侶。この良源像は強い印象を残すが、古い時代にこのような良源像は見られない。平林氏が「こうした異相像の反動として」と述べる通り、『元亨釈書』などには、良源が魔を調伏するような容貌（鬼のような姿）であつた、とある。『元亨釈書』の記述からも分かる通り、当初、良源の鬼のような姿は、魔を調伏する為の姿であり、女性を遠ざける為の姿ではなかったのである。又、右の伝説の他にも、これに類似した「豆大師」の伝説が伝わる。「豆大師」とは良源を描いた護符で、小さな良源の姿が刷られている。この姿は、良源が宮中に参内する時、女官に見つからないよう、豆粒ほどの大きさに変身した、という伝説を起源としている。⑩ 広く探索し得たものではないが、これらの伝説は、口碑で伝えられているのみで、明確な出典が見当たらない。出典不明である、これらの伝説の起源を考える時、『月刈藻集』所収話は、いくつかの示唆を与えてくれる。

『月刈藻集』所収話中に描かれる、女性からの誘惑を退ける良源像は、先に述べた二つの伝説に見える良源像と同一である。前後関係は不明であるが、これらは「女犯を戒める」という、同じ発想から生じた逸話であるといえよう。とすると、鬼面の伝説は、『元亨釈書』などに見える、鬼のような姿をした良源の逸話と、『月刈藻集』に見える、宮中女房との逸話が一体化して生じたものかもしれない。又、『月刈藻集』の成立年代は、江戸期と想定されている。『月刈藻集』所収話からは、良源の死後、長い時間を経た江戸時代に、「宮中に参内する美貌の僧侶」という良源像が求められ、新たな説話が展開された可能性が示唆される。そして、美貌の良源は、道心を守る為に、ある時は歌を詠み、ある時は鬼面を着け、ある時は豆粒ほどに小さくなるのである。

良源の伝記資料を中心に、その人物像は、時代を経るに従って、超人的な側面が強調され、神格化の傾向が強まる、と論じたことがある。⁽²⁾しかし、『月刈藻集』所収話には、それとは別の良源像が描かれていて、興味深い。『月刈藻集』所収話の出典が限定出来ない為、「女犯を戒め、道心を守る良源像」の上限が、どの辺りに求められるものか、現時点では限定できない。良源像の変遷を考える上で、重要なこの問題については、今後の課題としたい。

【注】引用文の字体は、概ね通行のものに改めた。引用文中の傍線は、畑中が付した。

(1) 『月刈藻集』の解説を載せる辞書類は、本書中に細川幽斎の記事があることから、その没年である慶長十五年（一六一〇）を成立の上限とし、下限を注記にある「寛永午春」―寛永七年（一六三〇）・寛永十九年（一六四二）―としている。この説の他に、内容の検討から、上岡勇司氏は、現存本の成立を宝永三年（一七〇六）以降とし、三輪正胤氏は、本書成立を元禄年間（一六八八―一七〇四）とする。依拠した辞書類、論文は以下に示す。〈辞書類〉『群書解題』・『説話文学辞典』・『日本古典文学大辞典』・『和歌大辞典』・『日本伝奇伝説大事典』・『説話文学史―説話文学小事典』・『日本説話伝説大事典』・『日本説話小事典』（論文）上岡勇司『『月刈藻集』の成立に関する問題―『本朝語園』との対比から―』（北海道教育大学札幌分校国文学第二研究室『国文学研究叢書』六号、平成二、一―十三頁）・三輪正胤『『月刈藻集』下巻冒頭部を読む―吉田流神道との関わり―』（説話と説話文学の会編『説話論集』第三集、清文堂、平成五、三四七―三七九頁）

(2) 『国書総目録』によると、静嘉堂文庫・東京大学・実践女子大学に写本が存在する。この他に、宮内庁書陵部の写本が、国文学研究資料館マイクロフィルムになっている。活字本としては、『続群書類従』三十三輯上（続群書類従完成会、昭和三十三年、三八―百頁）がある。本稿においては、書陵部本との対校がある『続群書類従』を使用し、適宜、静嘉堂文庫所蔵本・実践女子大学所蔵本で補完する。なお、東京大学所蔵本は、本稿引用箇所の本文を欠く。

(3) 『弘安十年古今集歌注』にこの和歌は「万葉集云」として引用されているが、『万葉集』にこの和歌は見当たらない。

(4) 『新編国歌大観』より、「いがぐり」と「えむ」を読み込んだ和歌を挙げる。「手にとれば人をさすてふいがぐりのゑみの内な

る刀おそろし」(『夫木和歌抄』15109)「たのむぞよ秋のはやしのいがぐりの時にあひてもゑむ身なれとは」(『雪玉集』4243)

(5) 山本節氏は「道命と和泉式部の説話」(東京大学国語国文学会『国語と国文学』五十七巻三号、昭和五十五、四十一～五十七頁)の中で、本歌が寂然の『唯心房集』に収録されていると述べる。これは『本朝祖師伝記絵詞』の出典を考える上でも注意されるが、私家集大成所収の『唯心房集』(関戸家本系・書陵部本系)に、この和歌は収録されていない。

(6) 『尊卑分脈』第三篇(国史大系、吉川弘文館、昭和三十六、五六四頁)に、基平男として記述があり、「(保延元年二五入滅)八十一才／牛車 修験名徳／法務明行法親王弟子／大僧正護持／(天台座主)／平等院／母／(哥人金葉以下代々作者)」と注記されている(／は改行を示す)。又、『僧綱補任』第五(大日本仏教全書、興福寺叢書第一、第一書房、一八二頁)永久六年に「権僧正行尊 五月廿九日補任四天王寺別当〔朱〕法務」とある。なお、行尊の事跡については、近藤潤一『行尊大僧正―和歌と生涯―』(桜楓社、昭和五十三)に詳しい。

(7) 『尊卑分脈』第一篇(国史大系、吉川弘文館、昭和三十二、三三七頁)。なお、道命の事跡については、田中新一「道命阿闍梨の伝記的考察」(愛知教育大学国語国文学研究室『国語国文学報』第四十二集、昭和六十、五十九～六十九頁)に詳しい。

(8) 注(5) 論文では、道命をとり上げ、「歌人」・「好色の人」・「法華経」という言葉に着目して、説話に見える人物像を明らかにしている。又、「聖と遊女」の伝承と「天王寺」の関わりについても指摘があり、行尊と道命の混同を考える上で、興味深い。

(9) 行尊の和歌に関する話題は、次の書などに記載がある。『宝物集』(新日本古典文学大系、岩波書店、平成五、一二八～一二九頁)・『古今著聞集』(日本古典文学大系、岩波書店、昭和四十一、八十八頁)・『撰集抄』(岩波文庫、昭和四十五、二六六～二六七頁)

(10) 道命の和歌に関する話題は、次の書などに記載がある。

① 「わたつ海に親おし入れてこの主の盆する見るぞあはれなりける」

『枕草子』(日本古典文学大系、岩波書店、昭和三十三、三一六～三一七頁)・『古本説話集』(新日本古典文学大系、岩波書店、平成二、四二二頁)・『世継物語』(続群書類従、続群書類従完成会、昭和二、一五九頁)

② 「いかならん聞かばや死出の山桜思ひこそやれ君がゆかりに」

『栄花物語』（日本古典文学大系75、岩波書店、昭和三十九、四二三頁）

③「古郷は浅茅が原とあればて夜もすがら虫の声のみぞする」

『宝物集』（新日本古典文学大系、岩波書店、平成五、三六頁）

(11) 良源の和歌に関する記述は、『貫之集』（田中登編『校訂貫之集』、和泉書院、昭和六十二、二〇二頁）に紀貫之との贈答歌が、『袋草紙』（新日本古典文学大系、岩波書店、平成七、一五三頁）に『続後撰集』入集歌である「そのかみの雲るのにはにあまれりし草のむしろもけふやしくらん」が、『元三大師利生記』（続天台宗全書 史伝2、春秋社、昭和六十三、二五六頁）に慈恵大師七猿歌が載る。

(12) 『今昔物語集』（日本古典文学大系24、岩波書店、昭和三十六、一九四頁）「天台座主慈恵大僧正ノ弟子ニナム有ケル。」・『元亨釈書』（国史大系、吉川弘文館、昭和五、二八〇頁）に「少登叡山。事慈恵。」とある。しかし、長保三年（一〇〇一）太政官符には、「故僧正尋禪入室」の弟子、との記述がある（『大日本史料』第二篇之十五、東京大学、昭和四十、三五二頁）。良源の没年は寛和元年（九八五）であり、道命は良源最晩年の弟子であったと思われることから、良源没後、その後継者である尋禪に師事したのであろうか。

(13) 道命の『法華経』に関する話題は、『宇治拾遺物語』（日本古典文学大系、岩波書店、昭和三十五、五十三〜五十四頁）・『雑談集』（中世の文学、三弥井書店、昭和四十八、二三三〜三四頁）・『東斎随筆』（中世の文学、三弥井書店、昭和五十四、二二八〜二二九頁）に見える。これらの説話は、道命が和泉式部のもとに通っていた時の話題であり、ここからは、和泉式部との関わりも見取れる。注（5）論文に、両者の説話に関する検討がなされている他、両者の関係については多くの論考がある。

(14) 良源には、円融天皇が不調の折、祈祷の験があった、という逸話が伝わっている。良源の場合、治療したのが円融天皇であり、女性ではない点が行尊・道命と異なる。

この逸話は良源の主要伝記をはじめ、多くの書に収録されているが、一例として、『慈恵大僧正伝』の記述を次に載せる。

「朱雀仙院御宇之間。天元四年八月。禁省有災。遷御後院。于時天皇聖体乖預。似有邪氣。遠近訪君。群臣窮藥。積精禱求曾無効驗。詔命比下。礼請和尚。和尚遂応勅命。侍禁省勤修法。崇朝加持。玉体燕安。和尚之宿房。丞相納言。済済送之。蓋又綸

緯之旨也。同十六日。結願之後。賜以輦車。又施菩提子念珠。綾法服一對。沙金百両。度者二人。佛法之驗。於是炳焉。其時在禁中者修觀。和尚曰。嗚呼禪侶当如斯哉。同二十六日又玉体有恙。和尚又応勅喚参内。念誦之間。風霧忽霽。」(続天台宗全書 史伝2、春秋社、昭和六十三、一九六〇一九七頁)

行尊については、『今鏡』(講談社学術文庫(下)、昭和五十九、二二三―二四頁)に次の話題が載る他、麗景殿の女御(藤原延子)の病を験力で治療した話題(『古今著聞集』等)が知れる。

「仁和寺の女院の、女御参りにや侍りけむ、御物の怪、その夜になりて起らせ給ひて、にはかに大事におはしましけるに、この僧正祈り申し給ひければ、ほどなくおこたらせ給ひて、御車にたてまつりて出でさせ給ひにけるあとに、物憑きに物うたせてゐさせ給へりけるこそ、いとめでたく侍りけれと伝へうけたまはりしか。」

(15) 原田行造『月刈藻集』の研究―構成の実態と説話の特徴をめぐって―(金沢大学教育学部『金沢大学教育学部紀要(人文科学・社会科学編)』第三十号、昭和五十六、一―十六頁)

(16) 『日本紀略』(国史大系11、吉川弘文館、昭和四、一三三頁)貞元二年四月廿一日条に「今日。天台座主良源於神樂岡吉田寺修舍利会。」とある。『今昔物語集』(日本古典文学大系24、岩波書店、昭和三十六、一四二頁)には、「而ル間、山ノ座主慈恵大僧正、此ノ会(舍利会、畑中注)ヲ母ニ礼マセムガ為ニ、□年ノ□月□日、舍利ヲ下シ奉テ吉田ト云フ所ニテ此ノ会ヲ行フ。」と、良源が母の為に舍利を比叡山から下ろし、吉田寺で舍利会を行ったことが記述されている。なお、同様の記述は『栄花物語』にも見えるが、良源の母はこの時点で既に他界しているの、これらの記述は史実とは異なる。

(17) 『月刈藻集』では、この話題以外にも、人物について混乱が見られる(堀川右大臣顕光女の逸話など)。この現象は、『月刈藻集』自身の問題であるものか、その前身となる資料に既にその混乱が見られたものか、現段階では判断がつかねる。

(18) 良源の護符に関する記述は、『元亨釈書』(国史大系、吉川弘文館、昭和五、七十七頁)に、「源道良雄毅。自把鏡写照曰。置我像之所必辟邪魅。從茲模印。天下争伝。方今人屋間架戸扉之間。黏貼殆徧。」とある。時代の下がった『東叡山寛永寺元三大師縁起』(続天台宗全書 史伝2、春秋社、昭和六十三、二四五頁)には「夜叉の形を現じ。鏡に御影をうつして。」とあり、良源が鬼の姿に現じたと明確に記述されている。

(19) 中尾堯・今井雅晴編『日本名僧辞典』(東京堂出版、昭和五十一、一八一頁)

(20) 畑中智子「良源像の変遷」(博士(文学) 学位請求論文、平成十七年三月京都女子大学に提出)

(平成十七年三月本学大学院博士後期課程修了、京都女子大学博士(文学) 取得)